

---

# 豚ペンギンサマー

中野 里美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

豚ペンギンサマー

### 【Nコード】

N8310S

### 【作者名】

中野 里美

### 【あらすじ】

少年と豚ペンギンの夏。

動物園に豚ペンギンがやって来た。僕はまじやった早く見に行きたいと思って母に動物園に連れて行ってほしいと頼んだ。母は食器を洗う手を止めて、少し考えると言った。

「じゃあ今度の日曜日に一緒に行きましょうか」

僕はやったーありがとう、と母に言う。

「それにしても、あんな気持ち悪い動物が見たいの？」

そんなことないよ、と僕は言いながらも母が豚ペンギンを気持ち悪く思うのもわかるので付け足した。

「でも、あの気持ち悪さもいいんだ」

「ふうん」

そうして三日後の日曜日に僕と母は四十分ほど電車で揺られたあと少し歩き、その動物園についた。休日ということもあってなかなか人が多い。外国人の姿もあった。僕は母の手を握り、はぐれないように注意する。

母は麦わら帽子にワンピースといった夏らしい格好だった。僕は短パンにTシャツだ。僕くらいの小学生も沢山来ていて、みんなライオンやコアラや猿なんかを注意深く見ているようだった。そして豚ペンギンの水槽にはチラッと目を通しただけで、通り過ぎていってしまう。

僕は水槽の前に顔を近づけて豚ペンギンを観察していた。

豚ペンギンの頭部は豚だ。体はペンギンで、体長は百三十センチくらいある。風呂に浸かるみたいに水槽に入っているものもいれば、ひたすら鳴き声をあげてバタバタと羽を動かすものもいた。その水槽にはだいたい十五匹くらい豚ペンギンがいた。

豚ペンギンはエンターテイナーだなと僕は思う。それぞれに個性があつて、なかなか面白いぶははと僕は笑った。

そうしたら、鳴き声をあげていた豚ペンギンが僕の方を見た。と

ても不細工だと僕は思う。その豚ペンギンは目を細めている。頭の耳と耳の間には雑草のように髪が生えていて、怒ったり不機嫌になると、この髪がオールバックに変化すると凶鑑に書いてあった。今まさにその豚ペンギンの髪がオールバックに変化しようとしていた。僕はくだらないと思った。なんだそれ。意味ないじゃん、と思った。チャキンといった具合にその豚ペンギンの髪がオールバックに変化をとげた。

豚ペンギンは僕の前にペタペタと歩いて来た。そして言った。

「おい、きみいまぼくのこと滑稽だと思ったでしょ。滑稽だと思っただってわかるんだよ」

うわ、しゃべった。僕はびっくりする。母を呼ぼうと思ったけどトイレに行っていた。

「ふて腐れちやうよ、いいの？ いいの？」

と豚ペンギンは続けた。とても高い声で早口だった。聞き取りにくい。僕は豚ペンギンの言っていることを頭でもう一度再生しなければいけなかった。

「滑稽だと思っでないよ」

くあー！ くあー！ と豚ペンギンは狂ったように鳴き声をあげて、羽をバタつかせた。

「ねえ、なんでしゃべれるの？」

豚ペンギンは動きを止めてまた僕を見た。ジーと見た。

「頭がいいからね。ぼくは」

「あつそ。もうライオン見に行くよ。ばいばい」

豚ペンギンはまた鳴き声をあげていた。

母がトイレから戻ってきて、僕は一通りの動物を見終わると満足して家に帰った。家で一日ゴロゴロしていた父に動物園での話をしながらご飯を食べて、お風呂に入り、興奮が冷めないままベッドについた。

しばらくすると、わっせわっせといった掛け声が聞こえてきた。

僕はなんだそりやと思つて目をこすり周りを見る。すると、月の明かりに照らされて豚ペンギンの姿が見えた。豚ペンギンは六匹いてベッドの脇を頭と羽で支えながら、どこかに運ぼうとしていた。顔は汗で濡れている。リーダーらしき豚ペンギンはベッドを支えてなくて、どこに運ぶか先頭で指示していた。羽で方向を指して、目を細めている。

それはベランダの方だった。リーダーの豚ペンギンがペタペタとその方に歩く。みんなついていく。ベランダのガラス扉は開けられていて、豚ペンギン達はそのまま歩いていく。

僕はなんとなくだけけれど、豚ペンギンがベッドをベランダから降り出すことはしないと思つていた。それに、なんだかワクワクしたから放つておいた。

そしてベランダを越えたと思つたら、奇妙な空間に僕はいた。

え？ なになに？ と思つて周りを見る。僕を運んだ豚ペンギンたちはもうどこかに行つてしまった。

僕はパジャマのまま、そこに立つてみる。なにかの工場のようなつた。とんでもなく広くて、明るい。僕はそこを進んでみることにした。

その広場は倉庫のようだった。並べてあるダンボールの一つを破ると、なかには洗剤が入つていた。豚ペンギン印の洗剤だった。他のダンボールには粉ミルクや食器なんかも入っている。どれも豚ペンギン印のものだった。

僕は馬鹿じゃないのと思いつつも、先に進む。鉄のドアがあつた。そのドアを開けて先に進んだ。ドアはいっさい手入れがされてなくて、取っ手はゆるんでいたし、閉まるときすごい音がした。ドアの先は階段になつていた。

階段にもダンボールが積んであり、それはブタボロメンソールとிட்டたタバコだった。中国製品の方がまだましだと僕は思う。その狭い階段が上がると、右と左に木のドアがあり、前には鉄のドアがあつた。まず右のドアを開けた。そこには豚ペンギンのロッカーが

ずらりと並んでいた。ドアを閉めて左のドアを開ける。そこは食堂のようだった。そして前方の鉄のドアを開けた。そこでは大量の豚ペンギンがなにかをしていた。

監督のような豚ペンギンが腕を組んでその辺を歩いている。

そこで、豚ペンギンはハムスターが遊ぶような水車のようなものに入って一生懸命に水車を回していたり、木でできた舵みたいなものを三匹がかりで回していたりする。そんなふうに通っている豚ペンギンたちは檻のなかにいて逃げられないみたいだった。

僕は大変だと思つてその檻を外側から開けていく。

「早く逃げる！ 逃げるー！」

と言うけど、どの豚ペンギンも檻から出ない。それどころか僕のことを目を細めて見てくる。そんなことをしていると監督豚ペンギンが駆け寄ってくる。監督豚ペンギンは僕の開けた檻をどンドン閉めていく。

そして、僕の前にネクタイをした豚ペンギンが現れる。その豚ペンギンは言った。

「やあ」

あ、しゃべれる豚ペンギンだと僕は思う。

「ねえ、なんでこんな酷いことするの？ 檻のなかの豚ペンギンあんなに汗かいてるよ」

「しかたないでしょ」

やっぱり豚ペンギンの声は聞き取りにくかった。

「何がしかたないんだよ」

「だって、彼らはぼくみたいに頭も良くないし、いろんなものを作ることもできないからね。ぼくみたいに頭がよければあんな事しなくてもいいのにね」

僕はしゃくぜんとしなかった。

「もしかして動物園にいたのはきみ？」

豚ペンギンは目を細めて僕を見たあと、ペタペタと歩き始めた。

僕はそのあとについて行く。

ネクタイを締めた豚ペンギンは一生懸命に働いている豚ペンギンを低賃金労働豚ペンギンと呼んだ。彼らは頭が悪くてサボるから、監督や檻が必要らしい。でもお給料は出すし、彼らは満足しているとネクタイ豚ペンギンは言う。

ネクタイ豚ペンギンについて工場の奥に歩いていった。

さっきの一生懸命に働いていた豚ペンギンたちのエネルギーは、ボコボコとパイプを伝わって巨大なマシンのところに集められる。そのマシンには宇宙船のようなコントロールパネルが設置されていて、三匹のメガネをかけた豚ペンギンが何やら操作をしているようだった。

メガネをかけた豚ペンギンの一匹がこちらに気がついて言った。

「あ、主任。おはようございます」

やっぱり甲高く早口の聞き取りにくい声だった。

ネクタイの豚ペンギンはそのメガネの肩を叩いて、「おー、ちゃんとやってるか」と言った。

メガネ豚ペンギンは「はい」と言って作業に戻った。

そのマシンからはベルトコンベアがいくつも伸びていて、ネクタイ豚ペンギンはその方に歩いていく。そのコンベアではマスクをした豚ペンギンがズラッと並んでいた。

ネクタイ豚ペンギンはマシンのほうを向いて「おそい！」と言った。

僕には「ほそい」とも聞こえて、なにがほそいんだろうと思った。

「なにがほそいの？」

「お、おそい！」

ベルトコンベアを見るとまだ何も流れてこない。ネクタイ豚ペンギンは急に汗をかき始めた。なにかの時間が迫っているのかもしれない。ネクタイ豚ペンギンはマスク豚ペンギンにちよっかいを出し始めた。羽でマスクを伸ばしたりしている。そして「ほそい」だか「おそい」だか良くわからない事をわめいていた。

でもようやく品物が流れてきた。それは食器や粉ミルクだった。

コンベアに立つマスク豚ペンギンはシールを貼ってダンボールに詰めていく。品物を詰めたダンボールは帽子をかぶった豚ペンギンが倉庫にしまうようだった。

そうして僕はまた倉庫に戻ってきた。

ネクタイを締めた豚ペンギンはなぜか満足そうだった。いちおう僕は言った。

「案内してくれてありがとう」

「はあ？」

と豚ペンギンは奇声をあげた。

「ぼくがすごいことがわかった？ わかったでしょ。きみは豚ペンギンを単なる可愛い動物だと思っていただけでしょ」

僕は時間をおいてこたえる。

「どうして僕をここに連れてきたの？」

「知らない」

「でも豚ペンギンが頭のいい生き物だってわかったよ」

「あっそ」

豚ペンギンはとても満足そうな表情になった。不細工だった。

そして、豚ペンギンはくあー！ と鳴いてバタバタと動いた。僕はベッドで目が覚めた。

夢だったのかと思っただけど、ベッドの脚を見ると微妙にズレているのがわかった。夢じゃなかったんだと僕は思った。

翌日、昨日行った動物園が朝のニュースに出ていた。豚ペンギンが食中毒で全員死んだらしかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8310s/>

---

豚ペンギンサマー

2011年4月29日16時25分発行